

---

# 私史

彩美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私史

### 【Nコード】

N2779T

### 【作者名】

彩美

### 【あらすじ】

作者の幼少期の実際の物語。  
ノンフィクションです。

## 1 芽生え（前書き）

どうも、彩美です。

最近何となく鬱になることが多く、今までの自分の人生を振り返ってみようと思いました。

拙い文章ですが、どうか皆さんも、私と一緒に過去を堪能しませんか？

過去と聞くと、後ろ向きなものを連想する人も多くいると思います。

ですが、過去は過去です。  
終わってしまった日々です。

終わってしまった行動なんて思い出さず、可能性広がる未来へ歩いて行きませんか？

心を落ち着かせる為、まずは辛い過去を出し切ってしましましょう。

## 1 芽生え

1993年、7月5日。

猛暑ではないにしろ、蒸し暑い昼間に私は産声を上げた。

午後1時23分。

何とも自慢出来そうな時刻。

比較的楽な出産で、私は25歳の父と22歳の母の第一子として生まれた。

因みに両方の祖父祖母共にとって、初孫だったらしい。

私にその時の記憶は無いが、大変可愛がられて私は大きくなったという。

3歳までは。

1996年、7月3日。

私の妹が誕生した。

私が3歳になる、二日前のことである。

ただ不幸なことに、妹は生まれつき心臓が弱かった。

それに重なり、病院で流行っていた風邪にかかり、生まれてから1ヶ月程家に帰ることが出来なかった。

当時のことは、覚えていない。

分かるのは、写真の事実。

私は最初、赤ちゃんの妹を可愛がっていたらしい。

髪を後ろで一つに括って、歩行器に乗る妹にミルクをあげていた。

まだ首の据わっていない妹をしっかりと支え、ストーブの前に座り、私は一人でピースをしていた。

そんな事実が、写真から分かった。

仲良しとは言えなくても、私が妹を好きだった証だろう。

・・・だがその事実は、私が物心つく頃には一変していた。

私は妹が嫌いだった。

それは、小学校に入学したばかりの歳でも、理解出来た。

何となく、両親や祖父祖母が、妹ばかりを可愛がっているような気がしたのだ。

『パパは、彩美のことばかり叩くし怒るもん』

そう思っていた。

実際、私は父にはかなり怒られていた。

叩かれるのも本当のことだった。

両親が妹にばかり優しくしているのが気に入らないと、私はよく妹の頭を叩いたり腹を蹴ったりしたものだ。

妹が大泣きする。

すると、鋭い顔をした両親がやって来る。

「お前は何をやってんだ」  
父が私の頭を拳骨で殴る。

私は情けない声を上げて泣き、その場から離れる。

・・・こんな地獄が、日常茶飯事だった。

何故私が『妹は甘やかされている』と思ったかと言つと、怒られな  
いから。

記憶上、妹が両親に怒られているシーンは見たことがない。

残っているのは、哀れな姉が殴られて、両手に物凄い力が込められ  
ているシーンだけだ。

ただ、妹だって全く大人しかったわけではない。

何か気に入らない事があると、生えて何年かしか経っていないその歯で、私の腕に噛み付いたという。

私は大泣きした。

自分より三つ下の、しかも『病弱』という名目で両親を奪った妹に、噛み付かれた。

そのことが、心の音を掻き乱す程屈辱だった。

妹はその後、怒られたのだろうか？

私にはその時の記憶は曖昧だ。

母は、「先に手を出した方が負け」といつも口走っていた。

けどそれは、本当に口だけだった。

「何で？先に手を出したのは　じゃん！」

私と妹が物で口論になり、妹が先に私の腕を叩いてきた時だった。

叩かれたのは腹が立ったが、『先に手を出した方が負け』と母が言っていたのを思い出し、私は真っ先に母に言い付けた。

「が、帰ってきたのは」　はまだ小さいんだから仕方ない」という一言。

更に、「お姉ちゃんなんだから我慢しないと」という言葉も付け加

えられた。

・・・年下だったら、何しても許されるの？

私は自分の運命を呪った。

## 2 気分次第

私は幼稚園の頃、給食の前に、友達と遊ぶのが好きだった。

先生が給食を運んできてくれるのを待つ時間。

その時間が嫌で、私はよく友達に「遊ぼう」と誘っていた。

遊びと言っても、箸箱や水筒を使って、会話をさせるといって、何とも微妙な遊びだった。

大抵は片方がもう片方の家に電話し、私達のテーブルに給食が置かれるまで、ずっと会話し続ける・・・といった内容。

時々役割が増え、お母さんも登場する。

「彩美は今、家にいないの」

「彩美呼んでくるから、もう少し待ってて」

などという台詞がお気に入りだった。

その、ある意味“ごっこ遊び”に誘うのはいつも私の方だった。

友達は付き合ってくれる時は付き合ってくれるが、逆の時は酷かった。

「ちゃん、遊ぼー」

私は横を向いてひたすら喋り続けていた友達に、その声をかけた。

「やだ」

「え・・・」

友達はまた横を向いて喋りだした。

それでも私は、諦めなかった。

「そんなこと言わないで、遊ぼうよー」

「やだってば」

うざったそうな顔をして、友達はそう言った。

楽しそうな口が閉じることはなかった。

(ふん・・・そんなに と喋りたいんだ。彩美のことなんて、ど  
うでも良いんだね)

この時、5歳。

当時は分からなかったが、今なら分かる。

この感情は、立派な“殺意”だ。

### 3 仲間外れ

やがて私が小学生になると、更に友達は減っていった。

小学校というものは当然、同じ幼稚園出身者だけでなく、違う幼稚園出身者や保育園出身者なども出てくる。

ただ、私が虐められたのは同じ幼稚園出身者からだったけれど。

同じ幼稚園出身者が、クラス内でグループを作り始めた。

と言っても、ほぼ全員属していた。

そして私は、外の人間にされていた。

休み時間にはいつもそのグループのメンバーで遊ぶので、私は独りになってしまっていた。

「ねえ　　ちゃん」

私はグループに入っている中で、幼稚園時代に仲の良かった子に声をかけた。

17

「彩美もみんなと遊びたいんだけど、グループに入れてくれない？」

「んー、　　ちゃんに言ったら、グループに入れてもらえるよ」

私は早速　　に声をかけた。

「　　ちゃん。彩美もみんなと遊びたいから、グループに入れてくれる？」

「えー、ヤダ」

は面倒臭そうにそう言った後、またグループの輪に戻っていった。

私は悔しかった。

は私と同じ幼稚園出身だし、幼稚園時代は普通に仲が良かったからだ。

一緒に積み木で遊んだり、鬼ごっこもした。

二人とも、喧嘩なんかしたこともなかったのに・・・

その後の教室は相変わらずの騒がしさに包まれ、私は視線を自分の膝に移した。

## 4 転校

私に住み慣れた街から見知らぬ街に越したのは、小学3年の春だった。

知らないと言っても、全く知らなかったわけではない。

親戚 母方の祖母の兄弟が、その街にたくさん集っていた。

祖母は、11人兄弟である。

私は先生に自己紹介を促されても出来なかった。

声が出なかった。

二十秒程の沈黙の後、先生が代わりに紹介してくれた。

その時私の額から軽く汗が滴ったのを、今でも覚えている。

「何処から来たの？」

「趣味はー？」

転校生の特権。

質問攻めだ。

「えーと・・・」

私はそういうのは苦手だった。

ただでさえ人嫌いなのに、初対面となると尚更だ。

そしてそれから二週間程が経つと、またしても転校生特有の“アレ”が始まる

「早くしてよー」

「待って。これが重くて・・・」

「もー！イライラする」

虐めだ。

あの日、私は掃除中で、水のたっぷり入ったバケツを運んでいた。

「どんだけ力ないのー」

「ごめんね・・・」

その時の私は申し訳ない気持ちでいっばいだった。

早く早くと急かすクラスメイトに、謝ってばかりいた。

「次からはさあ、もっと早くしてよね」

「うん・・・」

教室に着いた時、クラスメイトにそう言われた。

それと同時に、どんどん自分を嫌いになっていった。

何をするにも人より遅く、理解力に欠ける自分を。

思えば、これが未来を暗示していたのかもしれない

## 5 役立たず

あの時のことは、今でも鮮明に覚えている。

風が荒い日だった。

「この方位磁針を持って、グランドに出ましようねー」

習い始めたばかりの理科の時間。

眼鏡を掛けた年配の、優しそうな先生がそう言った。

（使い方、よく分かんなかったな・・・）

先生から説明を受けるも、理解力に乏しい私には分からなかった。

私は、風が荒々しく舞うグラウンドへ出た。

他の人は大抵友達と一緒にやっていたが、私は一人だった。

様子を見ている限り、優秀なクラスメイト達は使い方を理解しきったようだった。

私は一人、苦戦する。「こつやってやるんだよ」

不意に、上から声が降ってきた。

綺麗な黒髪の短めなストレート。

「あ、ありがとう」

方位磁針を正しい方向へと導いてくれたその子に、私はお礼を言っ  
た。

顔が熱くなるのが分かった。

恥ずかしい

他の皆は出来ているのに、自分だけが出来ない。

「・・・あんたって本当にどんくさいよね。何にも出来ないんじゃないんじやん」

ショックだった。

的を得ている意見だったから。

でもそれ以前に、出会って3ヶ月も経っていない人に、決め付けられたこと。

それが一番のショックだった

## 6 裏と表

私はその言葉を聞いて驚いたのは、確か小学4年生の時だろう。

「彩美ちゃんがあたしの悪口言ってたって、  
が言ってたよ」

本当に驚いた。

とは喘息仲間ということ、それなりに仲が良かった。

マラソンの時も、喘息の私達は参加出来ないから、いつもベンチに座って皆を応援していた。

その時に、色々語り合ったりした。

勉強のことや、趣味のことを。

「　　ちゃんか？嘘でしょ？私、悪口なんて言ってないもん」

問い掛けてきた　も、大した度胸だ。

掃除中、同じクラスの奴らが何人かいるというのに、そんな事をいうなんて。

もしかしたら　と　が仕組んで、私をクラス全員に虐められるキアラにしたかったのかも・・・とも思った。

だが、　はとても素直で優しい子だった。

自ら進んで、虐めや仲間外れをするタイプではない。

その優しさ故に、　の馬鹿話を信じてしまったんだろう。

は私とも仲が良かったが、　とも友達のようにだった。

は私と　の仲に嫉妬して、そんな作り話をふっかけたのだろ  
う。

最低だ。

因みに話をふっかけた　のその後は、私には分からない。

だが、　の今なら分かる。

親から聞いた話。

何でも今は、俗に云う不良なんだそうだ。

隣の家に不法侵入し、金を盗んだり、

学校でも煙草を吸ったりと、結構な問題児。

あの優しい笑顔は何処に行ってしまったんだろう。

もしかしたらアイツは、あの時 あの作り話を信じたから・・・

私よりも を信じたツケを・・・今、払っているのかもしれない。

## 7 要らない言葉

小4の時の担任と副担任が嫌いだった。

担任は何かと煩かった。

美人で二十代後半くらいかと思っていたが、私より一つ下（小3）の子供がいたらしく、驚いた。

その子を見たことがあるが、母親が綺麗系なのに対し、女の子は可愛い系の顔だった。

人を苛つかせる顔付きだった。

何かの発表の前日だった。

殆どの人は発表する班に対しての質問を考えるため、発表する内容が書かれているポスターが貼ってある廊下に移動していた。

私は前の時間に質問を考え終えていたので、席に着いたままだった。

廊下への移動は、自由だった。

「彩美さん、話し掛けられるの待ってるだけじゃ、駄目なんだよ！」

遠くから、そう怒鳴られた。

一瞬、何を言ってるのかわからなかったが、すぐに理解した。

『廊下に出ろ』

そう言っているのだ。  
私に。

私は質問は考え終えていたので、廊下に出る必要はない。

そう言おうとしたが、どうせこの場所からは、聞こえないだろう。

私、声小さいから。

私は担任を睨み付けたあと、仕方なく廊下に出た。

既に質問の書いてある、薄黒いプリントを持って。

廊下は騒がしかった。

クラスの殆どの人が、廊下に出ていたから。

私は、これ以上質問なんてないよな・・・と思いつつも、更に質問を考えた。

が、考えても無駄だった。

担任のことは、今でも悪党としか思えない。

それにプラスされたのが、副担任だったりする。

## 8 無効な授業

副担任は、明らかに四十代顔の、背の高い女だった。

当時は思わなかったが、あの顔はある意味、美人だったのかもしれない。

女には娘がいたらしい。

見たことはない。

ある教科は担任ではなく、副担任が担当していた。

確か、算数だったかな。

私は、算数が嫌いだった。

「 で、こうなって 」

副担任が計算の仕方を説明していた。

副担任はカツカツと黒板にも書き込んでいたので、私もノートをとった。

(量が多くて大変・・・先生、早いよ)

そんなことを思いながら紙に鉛筆を走らせていると

「彩美さん！下ばかり向いてるから分からなくなるんだよ！」

え？

私、ノートとってたんだけどな・・・。

先生はそう怒鳴り散らした後、再び授業を再開した。

私は急に恥ずかしくなった。

皆の前で怒られたという羞恥と、真面目に授業に取り組んでいて注意されたことへの憤慨。

その思いが交差した。

混じって膨らんで、私の顔は赤くなっていった。

この恨みは、一生忘れないだろう。

私以外にもノートをとっていた人は何人もいたのに……何故私だけ？

私はこの時、差別の正しい意味を理解した。

## 9 再来

私は、最上級生になるのが嫌だった。

それはやはり、幼少期に受けた“鼻屑”が原因だろう。

「何ですぐ1、2年生の所に行かなかったの!」

小学6年の、運動会の前日だった。

私は、丸く太った三十後半の女教師に叱られていた。

「だって、同じ系の　ちゃんが休んでたから・・・」

とは私と同じ、低学年を誘導する係だった。

移動せねばならない時、　　はベンチに座ってジュースを飲んで  
いた。

それを見た私は、（仕事、なかったんだ。私の勘違いか）と思って  
しまった。

そう安心した時、女教師に遠くから怒鳴られたのだ。

「全くもう！今まで練習してきたことは何だったの！」

私の言葉は聞いてもらえず、女は鋭い目で私を睨んだ。

怖いというより、怒りが込み上げた。

仕事をサボっても怒られない　　は、私が涙を堪えている間も、呑  
気にジュースを啜っていた。

憎たらしい。

私と友達だっていったくせに、肝心の時は見捨てるんだ……。

後に私が係の仕事の紙を見ると、その時間の枠に、私と　　の  
名前が入っていた。

（あの先生……気に入ってる生徒は叱らないんだ！）

実際、 は女教師と仲がよかった。

私と が話している時、女教師が話に加わってきて、気付けば私は1人置いてけぼりだった。

そのくらい、 は女と親しかった。

私は、あの女を許さない。

全校生徒の目の前で私に怒鳴り散らしたアイツを。

そして、 のことも。

嘘吐きは死ねばいい。  
利用しか考えない奴は、死ねばいい。

因みにその　　は、今、俗にいう“尻軽女”である。

高校は違うが、噂を聞いた。

小学生の時は精神的に病んでいたのに、よくあの状態から起き上がったものだ。

凄いとしか言いようがない。

・・・それとも、病んでいたからビッチリなのか。

## 10 儂い友情

中学3年の時、修学旅行があった。

私の班は5人グループで、全員女子。

普段は仲が良かったが、その時は、仲間割れをしていた。

・・・いや、仲間割れではなく、仲間外れだ。

犠牲者は、私。

修学旅行の最後の方は、殴る蹴るなど激しい喧嘩になった。

だが、その中でも特に、私が印象に残っていることがある。

遊園地を歩いている時だった。

(遊園地といっても、強烈なアトラクションない)

その時はまだ喧嘩はしていなく、私だけちょっと打ち解けてないかな、という位だった。

「お化け屋敷入ってみようよ」

髪は真っ黒で背の高い、活発な少女が言った。

後の　　という名前にあたる。

そのお化け屋敷は、あまり怖そうじゃなかった。

というのも、配られたパンフレットを見たからだ。

暗い館内が映っていたり、お化け屋敷には定番の井戸なんかがあったりした。

（お化け屋敷か。楽しそう・・・）

私の心は浮いた。

普段、お化け屋敷に入る機会なんてないし、  
ずっと前、家族で何処かの遊園地に行ったときも、お化け屋敷には  
入らせてもらえなかった。

だから余計、調子に乗ってしまったんだ・・・

気が付くと、4人は遙か遠くを歩いていた。

どうやら、行き先はお化け屋敷に決まっただらしい。

私を置いていった4人に腹を立てながらも、そいつらの後を追いかけた。

私達は、お化け屋敷に入った。

緊張と期待を胸に抱きながら。

・・・ひゅっ・・・どろどろどろ・・・

入り口に足を踏み入れた途端、そんな音楽が聞こえた。

同時に、右側にあつた透明なガラスケースから傘のお化けが三体飛び出す。

「きゃっ！吃驚した！」

私の口から、不意にそんな言葉が出た。

・・・本当に驚いたのだ。

入り口に入つてすぐに仕掛けがあつたというのもあるが、何より、その傘の顔がおぞましかった。

まるで、鬼と悪魔が合体したような顔をしていた。

傘がおぞましい口を開けて、『ケケケケ』と笑っている。

気が付くと私は、の制服の裾を掴んでいた。

「ちよつと！！服掴まないでよ！鬱陶しい！」

はそう言って、自分の服を強く引つ張った。  
私の疎ましい手が、一刻も早く離れるように。

「・・・入ったばっかだけど、出よっか。あんまり面白くないし」

眼鏡を掛けた、見た目は優等生そつな少女が言った。

そうだね、と私以外の子達が口々に呟いた。

(もうちょっと見たかったな・・・)

一番怖がったくせに、私はそんな事を思った。

・・・だって、他の仕掛けもこの目で確かめてみたいじゃない。

滅多に來ないのに。

その後は皆、私以外の4人は、相変わらず楽しそうに過ごしていた。

さっきの服の裾の事を思い出し、私だけがいつまでも心の暗室に閉

じじもっていた。

私が何故小説を書こうと思ったか。

その理由を聞かれて口から飛び出す一言は、

『存在主張』

である。

ある日何となく、自分の心を明かしたいと思い始めた。

色々な作品を書くことによって、私の考えを世に広めたかった。

いわば、日常での存在の薄さを補いたかったのだ。

虐めを受ける自分

友情に恵まれない自分

・・・克服しなかった。  
死ぬまでに。

記念すべき第一作品

「口怪女」について、まずは軽く語りたい。

この作品は、私を小説サイトに入らせるキツカケとなった。

何となく、頭に

『一人暮らしの男子校性と怪物』

というワードが浮かんだ。

私は紙に書いてから打ち込む派だ。

最初こそは上手く構成が浮かんだが、話が進むにつれて、いわゆる「手詰まり」。

そんな状態に陥ってしまった。

内容の方も、最初は

「完璧な和風ホラー」

を目指していたが、設定が設定故、何だかギャグの混ざった小説になってしまったように思える。

話の出来ない怪物相手だと、どうしても内容が限られてしまう。

とあって、魔法もののファンタジーにもしたくない……

そう思った結果、この『口怪女』が出来上がった。

この間読み直してみたが、

「酷い」。

その一言に尽きる。

勿論、悪い意味だ。

私がこの小説の読者だったら、

「最初あんなに盛り上げといて、最後あれだけえ！？」

と 文句を言っていたかもしれない。

あまり喋り過ぎるとネタバレになるので控えるが、いきなり出てくるキーワードに、読者も驚いたのではないだろうか。

1話ではそんな話微塵も出ていないのに、終盤からいきなりの赤ネ  
タ。

「ええーっ、この怪物って赤いものそんなに好きだったのー？」

・・・多分、殆どの読者はそう思ったんじゃないだろうか。

“伏線”があつてこそその展開だが、それが無い展開など、読者は納

得しないのである。

何となく最後だけは綺麗にまとまっていて、

「小説としてどうなんだろ」

と思った作品でした。

色々と残念……。

……あ、オムライスネタは、作者のオムライス好きから来ました。

因みに作者はケチャップかけない派です（笑）

## 12 解説？

今回は「ache」について語る。

この作品も、何となく思い付いて書き始めた。

妹に好きな人を盗られる・・・自分でいうのもなんだけど、何て痛々しい物語なんだろう。

付き合ってる人を盗られるならともかく、二年間ずっと見てるだけだった人に彼女が出来る。

これ以上苦しいことはないですよ。

作者自身も想い人はいるんですが、話したこともない人です。

・・・話しかけられないんですよ。

作者、歩花みたいに内気だから。

話が逸れてしまいましたね。

まず、内容。

作者はホラー中心に書いていくつもりだったので、今回は丁度良かったように思える。

ただ、今回は恋愛も混じってますね。

人間関係の恐怖・・・を描きたかったのだけど、  
最後には恐怖というより呆れですね。

今まで好きだった人の本性が見えてくる 嫌いになる

怖いなあ。

現実でもありますしね。

今回はギャグが全くなく、そういった意味では上手くいった作品  
なのかな。

そう思いたい。

・・・ところで、皆さんが「ache」で一番印象に残ったのは何処ですか？

作者は、歩花が車の走っている道路に飛び込むシーン。

実はアレ、元ネタ私なんです。

いや、実践はしてないですよ？

多分、小学4年生だったか。

もう何もかも嫌になっちゃって、「あそこに飛び込めば楽になれる」とか、思ったことが何度か。

いい具合に車がビュンビュン走っててね。  
隙間埋めるのが大変なくらい。

でも痛いのが嫌だから、飛び込むのはやめたんです。

あの日には、風が強かったなあ

すぐ目の前には病院があった気がする。

### 13 解説？

今回は、微妙に厨設定っぽい作品「sister」を解説しようと思う。

「とにかく教会の話を書きたい！」

そう思ったのがキツカケだ。

同時に純愛っぽいのも書いてみたくて・・・

ほら、前回の作品がドロドロだったから。

そして、恋愛にゴシック的なホラーも取り入れたいなあとか。

でもいざ書いてみたら、恋愛じゃなくて 教会に纏わるホラー話に  
なっていましたねー。

これは失敗（笑）

シスターとか空気。

主人公もただの好奇心旺盛な少年に。

「おいおい主人公。シスターとの恋は？」

そうツツこんだ読者も多いと思う。

だって、作者自身もツツこんだからさ^ | ^ ;

入学してから三年生になるまで、ずーっとシスターを見てるしか出来なかつたくせに・・・

いざ会ってみると、すらすら喋れるんだな。

・・・主人公馴れ馴れし過ぎでしょう。(。！。)

やー、色々と失敗した作品でした。

反省。

あ、でも興味のある方は読んでみて下さい。

最初の甘い感じとは、ギャップがありますよ。  
最後・・・

## 14 解説？

今回は「日記」という作品について解説してみる。

あらすじに書いてあるように、これは小学生の鬱日記。

主人公の悶々とした日々が綴られている。

何故こういった形式の小説を書こうと思ったかというと、自分の小学生時代を思い出したから。

私の小学生時代の日記を読んできたが、酷かった。

悪口ばかり・・・の中に、たまりにその日に食べた物が書かれていたり。

(朝食チャーハン、昼食うどん、夕食カレー・・・とか)

思えば、日記＝義務　だという考えを持っていたのかもしれない。

せつかく今日書いたんだから明日も・・・みたいな。

日記はあの頃の私にとって、正にストレス発散でしかなかった。

今日あった楽しいことを書き残そうなんて気持ちは、微塵もなかった。

内容について少し触れてみる。

私が思うにこの作品は、小学生の裏の心を映し出したもの。

普段明るいイメージの小学生が、実はこんなことで悩んでるんだよ  
ー・・・ってことを、大人に知ってほしかったのかもしれない。  
私は。

最後まで読んでもらえば分かると思うが、この作品は、私が書いた小説の中では唯一の good end 作品なのかもしれない。

## 15 解説？

SFに初挑戦！！

「Destroyer」について語る。

とにかく、論理も倫理も超えたためちやくちやな世界を描きたかった。

動機はそれだ。

こういったジャンルは書いたことがなかったので、読者がどう思っ  
か気になった。

その気持ちは、我が初投稿作品「口怪女」を投稿した時と同じだっ

た。

最初は戸惑ったが、書いてみると案外楽しいものだ。

魔の世界だから、人間の細かい機能を気にしなくて済む。

その点は非常に気楽だった。

・・・でも評価がなあ。

最低評価の1。

数字だけのやつだったけどね。

ショックでした(。ー。)

そりゃ、この作品に限ったことじゃないけど。

前作「日記」という作品も、最低評価の1をつけられたし・・・。

その前の作品「sister」なんか、数字評価すらされなかった。

そりゃ、作者の文章力の無さから評価したんでしょうが……。

落ち込みました……。

最初の二作品 「口怪女」と「ache」の評価が良かっただけに。

うーん。

もっと勉強しなきゃ。

## 16 最後に

ここまで読んでくださった皆さん、ありがとうございます。

今回限りでこの“私史”を終了したいと思います。

長かったような短かったような。

そんな感じがします。

ただ、普通の小説と比べたら気楽に取り組むことが出来ました。

作者の過去・考えをありのまま書けば良いんですから ^ | ^ ;

さて、話が変わりますが、皆さんは、生きている奇跡を感じたことはありますか？

私は微妙です。

だって、特に大きい事故とかに巻き込まれたこともないし・・・。

あ、でも。

歯がものすごく痛い時は、

「痛くないってスゴい」

とか思いますよ。

私がこれまでの人生で経験した痛みなんていうのは、歯関係か、下痢の時くらいですよ。

あと注射かな。

注射嫌い・・・。

だから、余計に思ってしまう。

事故や殺人に巻き込まれた人達は、どんな痛みを経験しているんだろう・・・と。

漫画とかドラマでの殺人シーンは見たことがあります、所詮想像しただけのモノ。

実際のこととは分かりませんよね。

死んでいった人達を思うと、ぞっとします。

殺人に巻き込まれることはないだろうけど、事故とか・・・

怖い。

だから皆さん、“痛み”がないことを、けして当たり前だと思わないで下さい。

一歩踏み間違えば、それは突然やってくる・・・

何よりも恐いです。

です。

二度目になりますが、この小説を読んでくださり、本当にありがとうございます。

何といたしますか。

心を曝け出せて、私自身もスッキリしました。

感謝の限りです。

どうか皆さん、ご自分を大切に。

それでは、この小説の読者の永遠の幸せを願って

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2779t/>

---

私史

2011年10月7日16時10分発行